

◆これまでのお話

俺こと矢羽根稔やばねみのるは大学四年生の冬、東京で就職活動にすべて失敗して田舎に戻った。

これまで『運のよさ』だけで生きてきた俺としては、青天の霹靂へきれきの出来事だった。

「畑を一枚貸すから、それで生活してみろ」

親父は失意の俺にそう言った。

雪がまだ残る二月の夜。俺は軽トラでその畑に行ったところ、畑の真ん中に宇宙船が突き刺さっているのを発見した。こんなこと、だれが想像できるだろうか。

宇宙船に乗っていたのは、外見がヤギそっくりの宇宙人。俺はヤギ商人と名付けた。

「そのペンダントはもしかして……」

ヤギ商人は、俺のペンダントに填まっている石を見て驚いた。

昔俺が拾った石は『分水嶺ぶんすいれいの理ことわり』という宇宙でも大変珍しいもので、ヤギ商人はそれを探しにはるばるここまで来たのだという。

「そのペンダントをいただければ、代わりにこの中からお好きなものをどうぞ」

リストには惑星をぶつ壊す兵器や、それから守る盾など、物騒なものが多かった。

「……この指輪は？」

「これは守護者の指輪と申しまして、星の余剰エネルギーを指輪に溜めて、持ち主が自由に使えるようにしたものです。これにしますか？」

もちろん頷いた。というか、星を砕く兵器なんて欲しくない。

こうして指輪と一緒に星をひとつ貰うことになったが、星なんて使いきれない。

仕方なく俺は、大学時代の悪友に【緊急】を出した。

俺たち同期五人はどんなときだろうと、【緊急】が出たら、何をおいてもかけつけ、問題解決まで手伝わなければならない。そう約束しあっていた。

「まさか……これ程とは」

星をみて絶句するのはリーダーこと阿賀野^{あがのさへ}、津村志乃^{つむらしの}、そして久遠寺龍彦^{くおんじたつひこ}の三人。

これに遅れて参加した高天原^{たかまがはら}ミヤを入れた総勢五名で、星の運営^{うんぎん}をすることに決めた。

だが俺が貰ったこの惑星チャンスには、重大が秘密が隠されていた。

正体不明の遺跡とそこに残された謎を解くために、ヤギ商人の知り合いであるプロカメさん（俺命名）を呼び寄せ、研究してもらった。

プロカメさんの活躍により解明された謎を追う内に大変なことが分かってきた。

「これはジーン族という生体転移陣を使う一族の遺跡で、このことが表に出ると星ごと狙われる可能性がある」

王冠スイートクラウンを戴く種族との邂逅により判明した事実。

それはジーン族ならば、宇宙最凶の種族ミグウ・ディプロ族の元へたどりつけるといふ事実だった。

ブラックホール星系を周回することで限りなく光速に近い速度を出していたジーン族の宇宙船は、およそ二万年ぶりにその姿を現した。

俺たちはジーン族の生体転移陣を使って、ミグウ・ディプロ族の本拠地へ赴く。

彼らは王冠スイートクラウンを戴く種族の狂った老体を使い、宇宙を破壊しようとしていた。

ギリギリの所で宇宙崩壊を回避し、やってきた宇宙戦艦によってミグウ・ディプロ族も消滅。宇宙に平和が訪れた。

その頃地球では、俺たち五人で『惑星チャンス移住局』という名の会社を作り、日本に隠れ住む赫鬼族かくきや蒼鬼族そうきという鬼人たちを仲間に加えることに成功していた。

移住局の活動は順調に進み、新しい社員を加えて本格的に見学会を開始する準備を整えた。

惑星の情報を出しにし、人々の興味を煽ってから星の見学会を実施したところ、世間の反応は予想以上、まさに劇的だった。

俺の畑から転移門てんいもんを使って別の星へ行ける。そのインパクトは世界中を驚愕させるに充分だったのだ。

一般人の見学を進める傍ら、俺たちはレンタルとして宇宙へ赴いて問題を解決し、代金代わりにオーバートテクノロジーの品物を貰って惑星を改造したり、他の種族を惑星チャンスに移住させたりした。

いま惑星チャンスは、多くの宇宙人と地球からの見学者で賑わいを見せていた。そんな状況を見て、米国が動き出した。戦後、日本を捨てて米国に渡った黒鬼族の襲来である。

俺たちが住む家を襲撃した黒鬼族も、ヤギ商人から買った防犯装置の前には撤退するしかなかったようだ。

俺たちは彼らを追って米国に飛び、敵対していた黒鬼族の里を襲撃。彼らを屈服させ、仲間に取り入れることに成功した。

だが、事態はさらに大事になっていった。

ついに米国だけでなく、国連までもが動き出したのだ。

国連は声明を発表し、転移門を人類の共有財産にするると宣言したのだ。

俺たちはこれまで通り国連の発表を無視し、沈黙を貫いた。

世界の情勢は刻々と変わる。

国連主導のもと多国籍軍が結成され、軍艦が日本近海にまで押し寄せる事態になった。

多国籍軍は本土上陸を果たす前に自滅し、ひとまずの危機は去った。

だが、その裏ではまったく別の陰謀が進行していた。

——人類は地球にとって有害である。

そう信じる集団が、移住局の面々を狙っていたのだ。

彼らは有史以前から存在し、集団の中に溶け込み、何もなければ善良な一般市民としてその生を終える。

ひとたび大きな歴史の変動があったとき、彼らはその真の姿を現す。

歴史上、彼らに滅ぼされた国は多い。

米国でさえ、何度となく危機に直面していたのだ。

国連職員に返り咲いたギルバムもまた彼らの一員だった。

ギルバムは俺の兄である矢羽根豊作ほうさくを使い、俺との直接対話にもちこんだ。ギルバムは転移門とその先にある星の管理を渡すよう迫る。

断る俺に対して銃による恫喝。それが叶わぬとみると、地球上にいる同胞に呼びかけるという最後の手段に出た。

それらすべてが録画され、ギルバムの野望は潰えた。俺たちの完全勝利である。

国連の首長が解任され、さらにギルバムが失脚したことで、移住局の地球における障害はほ

ばなくなつた。

今は『宇宙で三年間学ぶ』という長期滞在者たちのバックアップがメインの仕事となる。彼らとともに宇宙に目を向けていく時代が到来したのだ。

宇宙は広く、また深い。

学ぶべきことは多いが、成し得るには三年間はあまりに少ない。

それでも人類の中から選ばれた十万人は、惑星チャンスを起点として大宇宙へと羽ばたいていった。

……とまあ、回想してみたりする。